

世界の扉を開く者たちへ…



さよなら ありがとう ラストセッション お題は「鍵」

砂漠のシークレットガーデン

砂漠、その不毛の大地に奇跡的に現れる花園がある。水のないその地でたくさんの花が一斉に咲き乱れ、すぐにその姿を消してしまふ。1年のうち春にだけ現れる花園。その花園を見られることは奇跡的だ。

彼ら、奇跡を起こすものたちは、普段は土の中に眠っている。そんな彼らが花を咲かせられるのは、雨ではなく霧のおかげ。彼らは霧に含まれる、わずかな水分を使って生きている。春、彼らはあるとき霧で目覚め、一斉にその花を咲かせるのだ。そして、花を咲かせた彼らのまわりには小さな生き物たちが集まり、花園は樂園となる。彼らは太古の植物が進化したことで、そのような生きる力をもつようになった。花園はその力に支えられている。

ところが今、彼らの花園は破壊されようとしている。道路が花園を断ち、他の植物が侵入してきた。絶妙なバランスで生きる彼らにとって、外の世界に生きる植物はみな敵となる。彼らのもつ生きる力も及ばない。敵は彼らの居場所を奪っていく。

今、彼らが花を咲かせる数や時期に、異変が生じているという。将来この花園が見られなくなるともいわれている。この花園には、今、外からは開けることのできない鍵がかかろうとしているのだ。

私は部屋に飛び入ると、すぐに扉のカギを内側から閉めた。

扉が大きな音をたてて叩かれる。ドン、ドンドン、大丈夫、もうカギは閉めたから、開かない。

「エリカ、何してんの、あけなさい」

ドン、ドン、扉はまだ強く叩かれている。ふと私は不安になって、開くはずのない扉に背を当てて、意味もないのに踏ん張ってみた。

「エリカ、早くあけなさい、言うことを聞いて」

お姉ちゃんは扉を叩くのをやめた。でもまだ叫ぶのをやめない。扉を叩く音がなくなったので、声がさっきより強く聞こえた。それでも、私は扉の前から動かない。

お姉ちゃんが扉の前から去ったらしい、声が聞こえなくなった。それに気付いた途端、私はほっとして床の上に座りこんでしまった。冷たい床の感触を感じていると、私はだんだんと冷静になってきた。そう、私はさっきまでずっと不機嫌だった。これ以上にならないほどに不機嫌だった。お気に入りだったぬいぐるみを投げ、大好きだった絵本を破り、大事にしていた植木鉢を割ってしまった。破壊して、破壊して、それでも不機嫌は治らなかった。お姉ちゃんに怒られて、「お姉ちゃんの言うとおりにしなさい」って言われても、その理不尽さに怒り返してやった。それで、この部屋に逃げ込んできた。

扉を閉めて、カギをかけて、私は密室に閉じこもり。明かりの紐に手が届かないから、部屋の明かりは消えたまま。もう太陽が落ちてきて、部屋の中が赤く染まって、まるで違う部屋みたい。どうしよう、もう怒っていないのに、ちっとも不機嫌じゃないのに、それでも部屋から出られない。どうして私はあんなにも、不機嫌だったのだろうか。私はじっと扉を見つめる。扉が重い、カギが重い。いつまでたっても出られない。夜が窓から忍び込み、部屋を暗く染め上げる。怖いな、怖いな、暗いの怖いな。風が吹いては窓を揺らし、ガタガタガタと音を立てる。思わずそちらを振り向くと、見慣れぬ真黒なカタマリが。あれは机だ、私の机だ。分かっているも怖いもの。それで思わず目をそらし、恐る恐ると天井へ。何に見える、何に見える。怖い幽霊かな、怒った鬼かな、地獄の閻魔様かな。もう、お姉ちゃんは怒っていないかな、怒ってるよね、そうだね、きつとね。

ふと気付いた。目が覚めた。眠ってた？ 眠ってたらしい。気付いたら、真っ暗だ、何も見えない。暗闇の密室の中で、まるで自分がないみたいだ。怖い。恐怖が、頭をよぎる。それにさっきから足が寒い。どうしよう。外に、外にでたい。でも、扉は大きく、私の前に立ちはだかり、カギはその存在を、いやというほど見せ付けてくる。私はカギに締め付けられて、思わず窒息しそうになる。出られない。泣きたくなくなった。でも、怖くて泣けない。何にも見えない部屋の中、私は床に座ってる。

扉の外で音がした。がちゃん。

こんこん、と、扉がなった。「あけて」

私はすぐに扉のカギを開けた。ずっと開けられなかったのが嘘のように、すんなりと。

開けた扉の向こうには、お母さんがいた。

「ただいま。ごめんね、お仕事で遅くなっちゃったね、怒ってない？」

私はお母さんに泣きながら飛びついた。

「さっきまでずっと怒ってた」私はその言葉を言わないであげた。

鍵を持っていた

鍵を持っていた。もの心つく頃から持っていた。見るたびに、手に取るたびに、それは形を変えていた。何度も、何度も、変わるうちに、その変化は緩やかになっていった。そしていつしか、形を変えることはなくなった。どんな扉を開けるのだろうか。開けた先には何があるのだろうか。

いつものように、道を歩いていると、横に扉があった。みんなはまっすぐ進んでいった。ひとりの友達が、その扉に入ってしまった。僕も後に続こうと、扉に手をかけた。鍵がかかっていた。押しても、引いても、扉は開いてくれなかった。扉には、鍵穴がついていた。昔、もっていたあの鍵のことを思い出した。いそいで鍵穴に差し込んでみた。しかし、扉は開いてくれなかった。友達はどう見えないところまで行ってしまった。泣いた。寂しくて。悔しくて。悲しくて。役に立たない鍵を投げ捨てようとした。それでも、何かにすがるように、僕は鍵を捨てられなかった。何度も、何度も、自分の鍵を捨てようとしたが、結局、捨てられなかった。

時がたつて、扉の数はだんだんと増えていった。扉の前で座り込んでいる人もたくさんいた。あれから、信じられないくらい歩いた。たくさん扉を通り過ぎていった。どんな扉だったのか、もう全ては思い出すことができない。いろいろな人が、違う扉を開けていった。寂しさも。悔しさも。悲しさも。あの頃ほど感じない。今では、扉を見ただけで、開けられないことがわかった。試すこともなく、はじめから通り過ぎた。他人の鍵もたくさん見てきた。ほとんどの鍵が、僕には美しく見えた。とくに扉を開けた後の鍵はきれいだった。でも、なかには錆びているものもあった。折れているものもあった。自分の鍵はいまどうなっているのだろうか。

またいつものように扉があった。しかしいつもと違う何かを感じた。いつの間にか、手には懐かしい鍵が握られていた。くすんでしまっていたが、まだ、かすかに幼き頃に見た光を感じた。なくしたと思っていた勇氣に押され、鍵穴に差し込む。たとえ入らなくても無理やりこじ開けてやる。長い格闘の末扉が開く、低く、重々しい、その音は、なぜかこれまで聞いたどの音よりも澄んでいた。扉を開けると、心地よい風が吹きつけた。あの時、手に入れなかったもの。一度はあきらめたもの。僕はついに手に入れた。

扉の先には何も見えない。いつものように、ただ道が続いている。また、扉はあるのだろうか。僕にはそれはわからない。今は、鍵が使えたことを喜ぼう。そこにあるのは幸せだけとは限らない。幸せなんて無いかもしれない。でも、僕はまた歩き出す。開けられなかった扉が開いた。少しの間、鍵はここにおいておく。引き返すことは無いだろう。

開いた扉の前に置かれた鍵は少しだけあのころの輝きを取り戻している気がした。

あるところに5人の大学生がいました。

彼らは1999年の大晦日にシンガポールに旅行に行くことにしました。

出発直前になってホテルの予約を取った無計画な旅行だったのですが、年末で混み合う様々なホテルと交渉した結果、ある100階建ホテルの最上階、つまり100階のスイートルームに格安で一晩だけ泊まれることになりました。

しかし後に起こったことを考えれば、彼等は何故こんな時期にスイートルームが空いてしかもそこに格安で泊めてくれるのかを疑問に思うべきでした。

そして大晦日、シンガポールのそのホテルにチェックインして荷物を置いて街に遊びに行こうとロビーを通った時、フロントの係員が彼等に1つ注意事項を言いました。

「今夜、2000年問題が起こるかもしれないので、12時ちょうどに、ホテル内すべての電源を落とします。だからそれまでには帰ってきて下さい。」

∴しかし彼らは遊びに夢中になってその注意をすっかり忘れてしまい、ホテルに戻った時には12時を過ぎてしまっていました。

フロントも真つ暗でエレベーターも止まっている。

外の娯楽施設も同様に2000年問題を懸念して営業を停止している。

寒すぎてこのままフロントにいることもできない。

仕方なく彼らは自分達の部屋まで階段で歩いて行くことにしました。

しかしなんと言っても彼等の部屋があるのは100階の最上階、普通に階段を上って行ったのでは体力を消耗しつくして途中で行き倒れになりかねません。

「オイ、このまま普通にながっていくとホテルの中で遭難しかねない、1階上がる毎に交代で怖い話をしていって百話物語で気を紛らわしながら行こう」

と一人が提案し、怖い話をしながら100階まで行くことになりました。

そして1階上がるごとに怖い話をしてなんとか上に上がっていき、ついに100階の自分達の部屋の前にたどりつくことが出来ました。

すると最後に一人が

「いいか、百話物語を最後まで続けると実際に恐ろしい目にあうと言われているが、俺が今から話す最後の話は…本当に洒落にならない程怖いからな、絶対にビビルなよ」と他の4人に強く念を押して言いました。

(どんな話だろう…)と並々ならない彼の態度に不安を覚えながら仲間達は息を飲みました。

そして、彼は言った。

「一階に… 部屋の鍵を忘れた……………」

その「魔女」から、僕は、薄い緑色の紐のついた鍵をもらった。

まじよのかぎ

暗い闇が晴れて目を開けた先は、見慣れた風景だった。僕の家。だけど、少しずつ何かが違う僕の家。昔枯れた木がまだ鮮やかに葉を付けている。そして、その庭で若い女性と小さな男の子が遊んでいた。……魔女だ。25年前の僕の家に、予想通り、あの魔女がいた。

「すみません、」と声をかけると魔女はくると振り向いた。僕を見た瞬間顔を綻ばせて「あなた、と話しかけたが、まじまじと見つめると顔を赤らめて」「ごめんなさい、人違いでした」と言い直した。「あの、どういったご用件でしょう？」

魔女は僕を自分の旦那と間違えたことが恥ずかしいのか、少しはにかみながら僕に聞いた。僕は一瞬何も聞かない方がいいのではないかと思った。だが、それではここに来た意味がない。

「あなたは、……一体、何の禁忌を犯したんだ？」

魔女は、何のことかわからない、という顔をした。

その魔女が僕の村に来たのは大体10年前。魔女は、『人類が生きる上で最大の禁忌』を犯したと村人に囁かれ、火あぶりの刑となった。何をどうしたのか知らないが、魔女が死んだ後、僕の水筒の中に小さな鍵が入っていた。それは薄い緑色の紐がついていて、普通の鍵に比べてやけに角張っていた。何の鍵なのか全くわからなかったが、魔女は死んでしまったし、魔女がこの村に滞在している間、村を離れていた父さんにわざわざ噂より深く魔女の存在を知らせるのも酷だと思い、聞かなかった。僕は紐を端で結び、首にかけて誰にも魔女からもらったことは秘密にして、今日まで生きてきた。

まさか、あの鍵が、「タイムマシン」を開ける鍵だったとは。

だが、それならあの魔女がああときあの場所にあの年齢でいたことにも納得がいく。

過去に来て、何日か日が過ぎた。魔女には、僕と魔女の関係以外、大体のことを説明した。

そんなとき、突然魔女が僕の元を訪れた。

「あなた、あの機械で過去に行けるのよね！？」 お願いだから、あれの扉を開ける鍵を貸して！」 魔女の必死の剣幕に僕は押された。魔女をなだめながら理由を聞くと、とんでもないことだった。

—— 魔女の息子が、酔っぱらった知らない男に殺されたらしい。

「……だけど、過去に行って何をやるんだ？ 息子を生き返すのか？」

「それ以外に何があるのー？」

全てが一本の線でつながる。

「誰かを生き返すことは、人間が生きていく上で、最大の禁忌だ。」
まさか魔女の禁忌の謎を解く鍵が、自分自身にあったなんて。

「だから何ー？ そっね、じゃあ私はそれを犯すわ。そのせいで私が死のうが誰が死のうが関係ない。あの子が生きていける方法があるのに何も出来ないなんて出来るのと思うのー？」

魔女は叫んでいた。

ああ、このひとは、何も知らない。僕が自分の息子の25年後の姿であることも未来で僕が火を付けて自分が死んでしまうことも、何も、知らないんだ。ああ、なら。なら、もし僕がここで鍵を渡さなければ過去が未来が全てが変わる？ 僕は死ぬ。だが、このひとは、母さんは、死ななくなる。禁忌を犯すこともなくなる。その方がいいのか？ いいんじゃないのか？

僕がどんな表情をしていたのかわからないけれど、そんな僕の顔を見て魔女は、笑った。

—— 笑った？

「絶対に、あなたを死なせたくないの。」

それだけ言っ僕の首から鍵をもぎ取り、走り去っていく魔女に、僕は、何も言えなかった。

見えない鍵

世界の国旗を眺めていると、鍵が描かれた国旗というものがあつたりします。その国旗を持つ国とは、バチカン市国。世界最小の独立国です。(ドイツ・ニールランドよりも小さい)しかし、この鍵はいつた何なんでしょう。わざわざ国旗にするには意味があるでしょうし、バチカン市国といえは、キリスト教の総本山みたいな国です。きっと、何か面白いことが隠されているに違いありません。

キリスト教の概念に、天の国(神の国)なんていうものがあります。キリスト教での洗礼を受け信者になったものが天の国の民になれるということで、この状態だと、魂の救済を受けたことになるんだそうです。

この天の国に行くための、つまり、魂の救済を受けるための鍵こそが、この天の国の鍵です。最初は、キリスト自らが、弟子のペテロに授けたとされるものです。この鍵を語って、どんな洗礼を受けさせ、キリスト教を広めていったそうです。

分かりにくいかもしれませんが、実際に鍵があるというわけではなくて、そういうものを持つ人こそが、洗礼を行えると考えてよさそうです。まあ、そういう免許、資格のようなものだと思います。

さて、キリスト教は、しばらく迫害されてきました。そりや、当時から見たら、怪しい新興宗教以外の何物でもありません。しかし、これを信じる人が増えるにつれ、これを迫害するのではなくて、これを統治に使おうと考える皇帝が現れるようにもなりました。

これによって、キリスト教と公権力が結びつくことになりました。つまり、宗教的な権威が、権力として現実世界でつかえたりするわけです。こんな状態の中、世界の教会をまとめ上げた人が現れます。それがローマ教皇でした。

ローマ教皇は、ペテロの後継者を勝手に名乗って天の国の鍵を独占しました。そして、7つの関門を用意し、これをぐり抜けないと天の国に行けないと言ふようになったのです。言い換えれば、教会のみが洗礼を行える場所になってしまったのです。

教皇庁はこのあと、権威と結びついた権力を使い、ものすごい発展を遂げます。周囲の国から教皇領として、土地をもらったり、教会は免罪符を売ってお金を儲けたりしました。まあ、キリスト教という商売を独占して行っているようなものです。

しかし、中世末期になって、この事態をよしとしない人物がこれを是正しようと頑張りました。これが、いわゆる宗教改革です。これはヨーロッパ中に飛び火しました。その原点となる考えは、天の国の鍵は信仰によつてのみ与えられるという考えに基づいたものだったそうです。

これくらい、キリスト教では、重要なモチーフの鍵。だから、バチカン市国は国旗に鍵を描いているのですね。

ただ、そもそも、バチカン市国の元になったのは、教皇領。つまり、キリスト教の権威を使つて集めた土地です。まあ、そう考えると、私には、「現在でも鍵はまだこつちが全部握っているんだぞ」という意思表示にも見えてしまいますが。

信仰するものは救われる、魂の救済が行われる。その考えの根底をなすモチーフが鍵。これを手に入れようとその時々々の信者は、ペテロや、その周辺、そのあとの時代には教会、宗教改革後には聖書などに頼っていきました。

そして、現在でも鍵を手に入れようとしている人はたくさん居ます。さらに、それは必ずしもキリスト教信者には限らないでしょう。誰もが、何かしらのよりどころを求めて生きているなら、それが別に天の国の鍵として探さなくてもいいと思うのです。

家族でも、趣味でも、何かしらの、生きるための、つまり、魂の救済を求めるための鍵がきっと一人一人に用意されていると思います。その鍵があるからこそ、自分は現在元気に生きていられるのだと思うのです。未熟な私にはそれが何かはまだ分かりませんけど。

